

# PHOTO ESSAY

## 西条キャンパスの自然(植物)

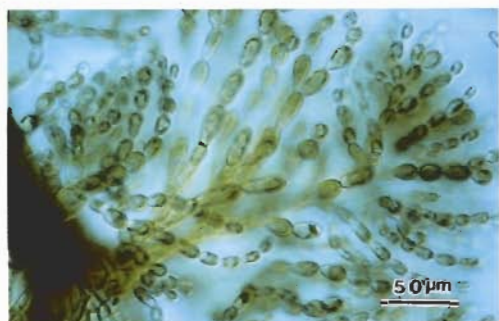
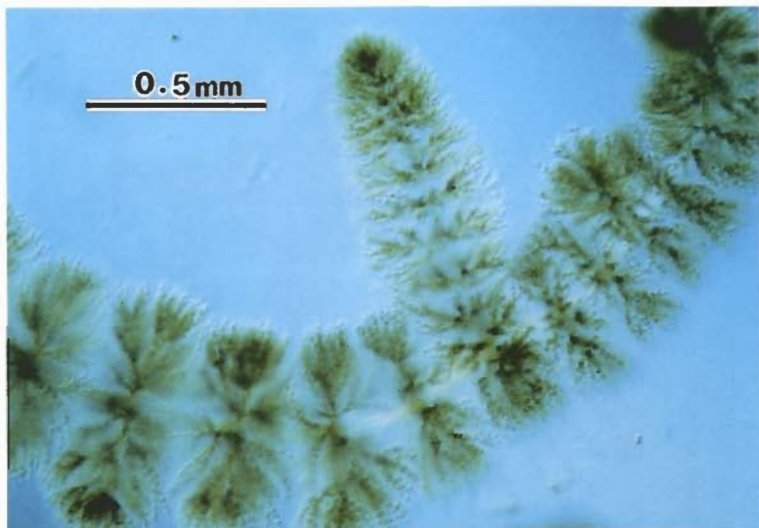
-6-

# 河蘊 (カワモズク)

*Batrachospermum moniforme*

理学部  
分類・生態学講座

中野武登



褐色の塊がカワモズク

冬から春にかけて、溪流や湧水中の石礫上に紫から褐色(時として青色)の小さな糸くずのようなものが綿雲のようにゆらゆら揺られて付着しているのを見かけることがある。これはカワモズクという藻類で、長さは最大でも10 cm程度であるから気づく人は少ないであろう。最近、わたしは、このカワモズクが、西条キャンパスの山中池からぶどう池の間の小溪流に生育しているという噂を聞いた。まさかと思いい現地を訪れて試料を採集し、顕微鏡で観察した結果、たしかにカワモズクであった。この藻類は清浄な水の中で生育することから水質環境の指標にもなる。わたしは、西条キャンパスを流れるこの小溪流が、まだカワモズクの生育を許している清浄な流れであることに安堵した。

カワモズクとは、河に生育しているモズクの意味であり、植物学的には紅藻類の仲間である。ちなみに、市場にも出回って、よく知られているモズクという酢のものとして食する藻があるが、これは褐藻類の仲間であり、カワモズクとは全く異なった藻類である。

カワモズクの属名である *Batrachospermum* はラテン語で、*Batrachia* (蛙) + *sperm* (卵)、すなわち蛙の卵に似ていることに由来している。たしかに溪流中に揺れているカワモズクは、蛙の卵塊のように見える。これを顕微鏡で観察すると、中軸という比較的堅い軸が体の中心を占め、その節の部分に輪生枝という多数の細胞が連なった糸状体が密生している。この輪生枝は粘質であ

り、輪生枝全体の外観が球状に見えることから、蛙の卵に似ているとはなかなかおもしろい属名をつけたものである。また「蘊」という語は、乱れた糸を意味しており、これもまた情緒ある名前である。

海のモズクは、「水雲」、「海雲」あるいは「海蘊」として「和名抄」に載せられており、すでに平安時代に食用とされていた海藻の一種である。しかし、カワモズクは、江戸時代、寛永年間(一七〇九年)に貝原益軒によって綴られた「大和本草」の巻八に「河蘊」として収録されたのが最初の記録であろうと思う。それによると、處々小流ニアリ海蘊ニ似テ其色青ク糸ヲツカネタルカ如クニシテウルハシ薬トシ或酢ニテ食ス味ヨシ但小瘡ヲ發シ身ヲ痒カラシム病人及有瘡人食スヘカラス北ニ向テ流ル、小河ニアリ他方ニ向テ流ル、川ニハナシト云漢名未詳凡水苔ノ類ノ中ニ蛙養ナト毒虫ノ子アリ食之則吐血而死スヨク擇フヘシ妄ニ食フヘカラス」とある。

カワモズクも海のモズクと同様昔から食用にされていたようであるが、どの程度利用されていたかはさだかでない。ただ愛知県内で食用にされていたことは神谷平氏(一九五四年)が報告している。彼も二杯酢で食べてみたが、海のモズクと同じように美味であったと記している。貝原益軒は、「毒虫の子が付着している」と記しているが、これはユスリカの幼虫のようである。興味のある方は、よく洗って食してみられてはいかがでしょうか。

(なかの たけと)